OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マイケル・トマセロと哲学的人間学 : プレスナー研究者によるトマセロ理論の受容、その問題と意義
Author(s)	濵田, 洋輔
Citation	Sprache und Kultur. 2022, 41, p. 5-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87545
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マイケル・トマセロと哲学的人間学

――プレスナー研究者によるトマセロ理論の受容、その問題と意義――

濵田洋輔

ヴォルフガング・ケーラー、ロバート・ヤーキーズ、ジェーン・グドールらを始めとする研究により我々は今日、現存する中で人間（ヒト）の最近縁種であるチンパンジー（やボノボ[1)]）がかつて考えられたより遥かに知的な生物であることを知っている。しかし、チンパンジーがそのように遺伝的に人間に非常に近い知的な生物であるにもかかわらず、今日人間は地球上至る所で繁栄し、チンパンジーはアフリカの一部で絶滅の危機に瀕している。「似通った」動物である人間とチンパンジーの間になぜこれほどの隔たりが生じたのであろうか？　こうした問いに興味を抱く人間は決して多くはない。しかし、人類学者や霊長類学者、あるいは心理学者や哲学者などといった人々の中には、多数派ではないながら、そうした問いを主要な研究対象とする人々が存在する。ここで論じるマイケル・トマセロはそうした中の一人である。

2018年までドイツのマックス・プランク進化人類学研究所の所長（の一人）を務め、現在は同研究所の名誉所長でありまたデューク大学の教授でもあるマイケル・トマセロは、言語学、発達心理学、人類学といった広い問題圏を研究対象とするアメリカ出身の心理学者であり、特に今し方述べた問い、つまり、人間とチンパンジー（および他の霊長類）の間の決定的な差異は何かという問いに纏わる諸研究によって世界中に広くその名を知られている。

そのトマセロの研究が以下では問題となるのであるが、ただし、トマセロの研究を直接に分析することが本稿の主要目的ではない。本稿が主眼とするのはトマセロの研究それ自体ではなく、その研究のドイツ哲学界における受容である。トマセロの研究がドイツ哲学界において最も大きな反響を得たのは――マックス・シェーラー、アーノルト・ゲーレン、ヘルムート・プレスナーに代表される――

哲学的人間学（という哲学の一潮流）の研究者たち、その中でも特に、プレスナー研究者たちにおいてと言ってまず間違いないであろう。そのため、より具体的に言えば、本稿の主要目的はトマセロの研究がプレスナー研究者によってどのように受容されたのかを明らかにすることにある。加えてまた、その受容の在り方に存する問題と意義とを示すことにある。

以下では1.）まずトマセロの基礎理論とでもいうべきものを概略し、2.）それがプレスナー研究者らによってどのように受容されたかを見た上で、3.）最後にその受容の在り方の問題と意義とを示したい。

1.

先に触れたように、トマセロが対象とする研究分野は幾つか存在しているが、――少なくとも1990年代後半以降――彼の研究全体の動力源とも呼んでしかるべき一つの問いがある[2)]。その問いとは大雑把に言えば、「人間という存在を動物界全体において特別たらしめているものはなにか」という問い、より具体的に言えば、「チンパンジーなどの他の霊長類には見られない『文化（の蓄積）[3)]』が人間のみに可能であるのは人間のどのような能力によるのか」という問いである。

そうした疑問を自身の諸研究の動力源としている思想家や研究者はトマセロに限ったことではないが、彼にはそうした人々の中でも目立った特徴がある。それは彼が人間に見られるあらゆる文化の根本的な原因を、ある一つの人間固有の能力に求めたということである。トマセロによればつまり、人間のみに備わったあるたった一つの能力（認知能力）こそが人間の「文化的な」暮らしと他の霊長類の「非文化的な」暮らしの様々な違いを生み出す源泉となっているというのである[4)]。

しかしなぜトマセロは、ある一つの人間固有の能力こそが人間に見られるあらゆる文化を可能にしたに違いないと主張できるのであろうか。初期の著作ではトマセロは、我々人間（ホモ・サピエンス）とチンパンジーの共通祖先が分岐して以降経たと考えられている600万年という期間は、その間に進化の過程を通じて二つ以上の新しい能力が人間に備わったと想定するには短すぎると論じている[5)]。また後に書かれた論文においては、600万年という期間の「短さ」にこそ言及していないが、人間と他の霊長類の間の様々な違いは出来得る限り節約的（簡潔）に説明する必要があり、その必要に従えば、人間のあらゆる文化の起源は人間固有

のただ一つの能力に見出せるという結論に至ると論じている[6]。

では、あらゆる人間の文化を可能にするただ一つの人間固有の能力とはなにか。トマセロは1999年の時点では、研究者の間で「心の理論 theory of mind」として知られる能力こそがそれであると主張していた。「心の理論」とは――自分が心（心的状態）を持った存在であると理解するだけではなく、同時に――他者もまた自分が持っているのと同じような心（心的状態）を持った存在であると理解する能力のことである[7]。トマセロはある時期を境に「心 mind」に代わる言葉として一貫して「志向性 intentionality」という言葉を用いるようになるため、以下では「志向性」＝「心」として論を進めたいが[8]、では「志向性」（＝「心」）とは具体的にはなにを意味するのであろうか。トマセロは2014年の著作において――決して明瞭に表現されたとは言い難いかなり込み入った形で――「志向性」を詳しく説明しているのであるが、ここではその詳細は重要ではないから、そこでの説明を極めて大雑把に纏めて、「志向性」とは様々な可能性を意識的に考慮した上で目的に向かって柔軟な意思決定を行う能力のことであると理解しておきたい[9]。さらに簡単には、「志向性」とは意識的な意図を伴った心の在り方のことであるといった程度に解しておきたい。つまり、「心の理論」こそが人間のあらゆる文化を可能にしたというトマセロの1999年の時点での主張は次のことを意味している。――自他ともに志向性（＝意識的な意図）を持った存在であると認識できる能力は人間のみに固有なものであり、その能力こそが動物界において人間を唯一無二の文化的存在とした根本要因である。

こうした主張はしかし、後に撤回されることとなる。トマセロは2014年の著作にこう書いている。「1999年の本は単純明快なものだった。当時、我々が手にしていた類人猿とヒトとの比較データがわずかなものだったためだ。そのおかげで、『他者を、志向性〔＝心〕を備えた行為者とみなしているのはヒトだけで、これがヒトの文化をもたらしているのだ』というようなことが言えたのだ。しかしいまとなっては、事情がもっと複雑であることが分かっている」[10]。

自他の様々な研究成果を考慮した結果、このようにトマセロは「心の理論」、つまり、自分も他者も心＝志向性を備えていると認識する能力は人間だけではなくチンパンジーにも存在すると考えるようになる訳であるが[11]、実の所これは自説の「撤回」というよりもむしろ自説の「修正」と呼んだ方が遥かに適切である。というのもトマセロの理論は引き続き「志向性」（＝「心」）という概念を基盤として

いるからである。加えてまた、人間と他の霊長類を分かつのはただ一つの人間固有の能力であるという考えを捨てた訳でもないからである。

理論修正後のトマセロによれば、人間（文化）と他の霊長類（非文化）の間の決定的な違いとなるものは、志向性（＝心＝意識的な意図）が自他ともに存在することを理解する能力ではなく、志向性を他者と共有する能力である。この「共有志向性仮説 shared intentionality hypothesis」と呼ばれる説によると、志向性の共有という人間固有の能力は①「志向性の接続 joint intentionality」と②「集合的志向性 collective intentionality」という二つの段階を経て開花したものとされるが、その二段階の発展を簡潔に纏めれば以下の通りである。①の段階においては「私」の志向性（＝心＝意識的な意図）と「あなた」の志向性が二者間で接続・共有される。それに続く②の段階においては、集団内の様々な主体の個別的な志向性が集団全体で共有する一つの志向性と接続される[12)]。

つまり、複数者間で志向性（意図）を接続・共有するという能力こそ、人間（文化）と他の霊長類（非文化）を分ける根本的な要因であるとトマセロは主張する訳であるが、この主張は徹底したものとなっている。というのも彼によれば、文化の蓄積に大きな役割を果たす言語、高い知性（反省的推論能力）、協力行動といったものでさえ志向性の接続・共有という能力に基づいて初めて可能となったものであり、従って、（単純なものから極めて複雑なものに渡る）道具制作、（狩猟採集活動から科学活動にまで渡る）社会慣習、社会規範、社会制度などといったあらゆる文化的なものは、根本的には集団における志向性の接続・共有を基盤として成り立っているというのである[13)]。端的に言ってつまり、トマセロの基礎理論とでもいうべき考えとは、「志向性の集団的接続・共有という人間固有の能力こそが人間に見られる全ての文化を可能にした」というものなのであるが、以下ではこの理論がドイツの哲学界、より具体的にはプレスナー研究者においてどのように受容されたかを見て行きたい。

2.

トマセロは真面目に哲学に耳を傾ける数少ない自然科学者の一人であり、「志向性の共有」という彼にとって軸となる考えも哲学者から拝借したものである。ただし彼が強い影響を受けたのは、ジョン・サール、マイケル・ブラットマン

などといった英米系の哲学者であって[14]、ドイツ哲学からの影響はこれといって見られない。にもかかわらず、トマセロはその功績が称えられ、プレスナー賞という――哲学的人間学を代表する――ドイツ哲学者の名を冠した賞の初代受賞者（2014年）となっている[15]。当時のプレスナー協会の会長であったヨアヒム・フィッシャーという哲学的人間学（特にプレスナー哲学）の研究者は、その授賞式の祝辞において次の様に述べている。

人間行動や人間社会の理解において、大多数の研究者や哲学者は、a) その原因の全てを生物学的な要素へと還元する自然主義（Naturalismus）かb) その原因の全てを文化的な要素へと還元する文化主義（Kulturalismus）のどちらかの陣営に属しているが、どちらの陣営とも片手落ちというゆゆしき問題を抱えている。そうした「自然主義か文化主義か」という誤った二極化の中にあってトマセロはどちらの陣営にも与せず、両者を調停させることのできる第三の道、つまり生物学的要素も文化的要素も同時に扱える道を選んだ。そしてこのトマセロの取った第三の道こそ、百年ほど前にプレスナーが選んだものと同じ道なのである[16]。

そのようにフィッシャーは、トマセロとプレスナーは人間理解において――大多数が取ることのない――同じ第三の道を行ったと言うのであるが、フィッシャーによれば二人は単に同じ道を行ったというだけではない。そうではなく、二人は根本的には全く同じ方法でその第三の道を可能にしたというのである。ではその同じ方法とはなにか？ その方法とは、人間も他の全ての生物と同じく進化の過程を通じて誕生してきたものであるとする自然主義的見解に基づくと同時に、その進化の過程を通じて唯一人間のみには文化を可能にする能力が備わったとして、人間を文化主義的にも理解するという方法である[17]。

トマセロが人間と他の霊長類の間の決定的な違いを「共有志向性（志向性の接続・共有）」という人間固有の能力に見出したことは先に述べたが、トマセロはプレスナーの哲学に刺激を受けてこの考えに至った訳ではない（フィッシャーも認める様に、そもそもトマセロはプレスナーを全く読んでいないであろう[18]）。また、プレスナーが100年前にトマセロに先立って「共有志向性」という考えを打ち出していたという訳でもない。人間と他のあらゆる動物の決定的な違いを作る人間固有の能力をプレスナーは「脱中心性 Exzentrizität」と呼んでいるのであるが、これは端的に言って、自己中心的な行動や考えから距離を置くことができる能力を意味している。つまりプレスナーによれば、人間以外のあらゆる動物は常に自

分自身の関心のみに従って完全に自己中心的に行動しているが、人間のみは唯一そうした自己中心的行動・考えから距離を取ることのできる存在だというのである[19]。このようにトマセロとプレスナーは人間と他の動物（霊長類）を決定的に分ける人間固有の能力をそれぞれ別個に提出しているのであるが、フィッシャーによれば、トマセロの「共有志向性」という概念とプレスナーの「脱中心性」という概念とは大枠では同じ事柄を指している[20]。

以上のようにフィッシャーは、プレスナーとトマセロは――自然科学者と哲学者という違いこそありながら――人間を他のあらゆる動物（霊長類）から決定的に分かつ人間固有の能力を同定するという同じ方法によって、自然主義と文化主義を調和させることのできる第三の道を可能にしたと主張する訳であるが、フィッシャーにとっては、単にプレスナーとトマセロが同じ道・同じ方法を選んだということだけが重要なのではない。フィッシャーにとって真に重要なのは、プレスナー哲学の先駆性と正しさとがトマセロという現代の著名な科学者によって裏付けられたということなのである。であればこそトマセロはプレスナー賞の初代受賞者に選ばれたのである。またであればこそ、フィッシャーはトマセロを「21世紀における……哲学的人間学〔≒プレスナー哲学〕の英雄」[21]とさえ呼んで称揚しているのである。

以上、第一回プレスナー授賞式の際のフィッシャーによる祝辞を基にトマセロの理論がプレスナー研究者にどのように迎えられたかを見てきたが、これはなにも祝辞だからと言ってお世辞を並べ立てている訳ではない。確かにフィッシャーはトマセロを主題として扱った論文において、哲学的人間学の立場からトマセロにおける問題点をいくつか挙げてはいる。しかし、それらはトマセロ理解の根本に関わるものではないし、その論文においてもフィッシャーはトマセロを哲学的人間学の再興者として高く評価しているのである[22]。また、トマセロを21世紀における哲学的人間学（≒プレスナー哲学）の「英雄」とまで呼ぶ哲学研究者はフィッシャーくらいのものではないかと思われるが、同様の見解を支持する著名な哲学的人間学の研究者は彼一人ではない。フィッシャー以前にプレスナー協会の会長を務めていたハンス＝ペーター・クリューガーも、プレスナーとトマセロの関係についてフィッシャーと同様の主張を行っている[23]。（ゲーレンを研究の主要対象とする）クリスティアン・ティースは、トマセロの研究をプレスナー哲学の正当性の自然科学的裏付けとまではしないながら、自然主義と文化主義を調和さ

せる道を選んだということにトマセロとプレスナーの共通点が見出せることには同意している[24]。

このように、トマセロは主要なプレスナー研究者らによって、プレスナー哲学を今日的な形で再興してくれた重要人物として認識されているのであるが、そうした認識に基づいた彼らのトマセロ理論の積極的な受容には、実の所少なからずの問題が付随している。以下ではそうした問題と、それにもかかわらず存在するプレスナー研究者におけるトマセロ理論の受容の意義を明らかにした上で本稿を終えたい。

3.

プレスナー研究者によるトマセロ理論の積極的な受容に存する問題は、大きく分けて三つに分類できる。以下ではその三点をそれぞれ見て行きたい。

①フィッシャーによれば、トマセロに哲学的人間学の「英雄」たる資格があるのは彼が自然主義と文化主義という「敵」に打ち勝ったからであるという。まず第一の問題点はこの「トマセロの敵」理解に関わっているのであるが、フィッシャーは現代が自然主義優位の時代であると認めていることでもあるから[25]、ここでは現代において文化主義よりも「強敵」と言える自然主義に関する問題についてだけ触れておきたい。

フィッシャーは生物的要素を考慮することのない文化主義陣営の代表者にはディルタイ、フーコーといった哲学者を、またもう一方の文化的要素を考慮することのない自然主義陣営の代表者にはダーウィン、ドーキンス、デネットといった生物学者や哲学者を挙げている[26]。今し方述べたようにここでは後者のみを扱いたいのであるが、ここに関するフィッシャーの議論の問題点は、ダーウィンもドーキンスもデネットも――フィッシャーの主張とは異なり――決して生物学的観点からのみ人間を理解している訳ではないということである。それどころか彼らは人間が特殊な文化的存在であることを認め、文化という問題を積極的に議論の中に取り組んでさえいるのである[27]。もしフィッシャーが彼らの著作、しかも彼らのこうした問題に関する主著とでも呼ぶべき著作をさえ読まずに聞き齧ったことを基に、彼らを――フィッシャーの考える上記の意味での――自然主義者とみなしているのであれば、それはいわゆる藁人形論法の最たるものとでも言うべ

きであろうし、もし読んだ上でのことであれば信じがたい曲解もしくは誤解とでも言うべきであろう。

とはいえ、トマセロ自身がダーウィン、デネット、ドーキンスといった人物を「敵」とみなしているのであれば、誤っているとはいえ、フィッシャーの主張もまだ理解できる。しかし、実情はそうではないのである。まずデネットとドーキンスに関して言えば、筆者の知る限り、トマセロは二人とも肯定的な形で言及している[28]。つまりトマセロ自身はドーキンスもデネットも「敵」としてよりはむしろ「味方」として認識しているのである。ダーウィンに関して言えば、彼はトマセロの「味方」どころかトマセロにとっての「英雄」とさえ言っても過言ではない。というのも、トマセロ自身がはっきりと彼の研究はダーウィンの進化論にこそ基づいていると明言しているのである[29]。つまりフィッシャーの様にドーキンスやデネット、ましてダーウィンをトマセロの「敵」と認定することは、トマセロ自身大いに困惑するに違いない問題であると言って良い。

②そのようにダーウィンらを誤った仕方でトマセロの「敵」とみなすのは主要なプレスナー研究者の中でもフィッシャーに限った問題と考えて良いであろうが、次の問題は別の主要なプレスナー研究者であるクリューガーにも当て嵌まる。その問題とは、彼ら二人が奇妙にも、トマセロが依って立つダーウィン流の自然主義的生物理解をプレスナーがはっきりと拒絶しているという事実を考慮していないということである。

今し方述べたようにトマセロにとってダーウィンは敵でないどころか偉大な先駆者であるとさえ言えるが、一方のプレスナーにとってダーウィンはまがうことなき敵であった。それも天敵とさえ言って良い。プレスナーは、ダーウィン進化論は自分の考えと真っ向から対立する完全に誤った説であるとして繰り返し激しく論難しており、プレスナーの生物学理解が反ダーウィン主義的であることには疑いの余地がない[30]。加えてプレスナーの生物学は生気論――生命現象の根底には科学的・経験的には決して捉えられない力が存在しているという考え――を基盤としている。つまり、プレスナーにとっては、非経験的・非自然科学的理論（彼にあっては「位置形式の理論」と呼ばれる）こそが人間を含んだあらゆる生物理解の基礎となるべきであって、経験的な観察や実験に基づいた自然科学は生物理解において二義的な意味しか持ち得ないのである。言葉を換えれば、プレスナーにおいては非経験的・非自然科学的に措定された生気論的理論（位置形式

の理論）こそが根幹となる絶対的な理論であり、その理論はどのような新しい経験的事実の発見によっても覆されることがないものとされているのである[31)]。

トマセロが――プレスナーとは真逆に――ダーウィン進化論を基盤としていることは既に見たが、自然科学者である彼の理論は――やはりプレスナーの理論とは正反対に――根本から自然科学的なもの、つまり観察や実験といった経験的事実にこそ基づいたものであり、その理論に反する新事実の発見は理論の修正や放棄を要求する。であればこそトマセロは、上に見たように自他の研究成果に基づいて、「心の理論こそが人間と他の霊長類の間に決定的な差異を産み出す能力である」という初期の主張を撤回し新しい修正案を提示したのである。つまりプレスナーの生物学理論・人間理解が反ダーウィン主義的でありかつ非自然科学的なものである一方、トマセロの生物学理論・人間理解はダーウィン主義的でありかつ自然科学的なものなのである。このようにプレスナーの非自然主義的理論とトマセロの自然主義的理論は根本的な点において相反するものであり、その両理論を基本的には同じ道を歩むものであるとするプレスナー研究者の主張には問題があると言わざるを得ない。

③プレスナー研究者によるトマセロ理論の受容における最後の難点は、現代の科学状況の認識に関するものである。この難点に関してはいくつかの問題が存在するが、まず一つはダーウィン進化論（自然主義）に基づいて人間の文化的特性（文化主義）を説明しようとする「第三の道」を選んだ研究者は――プレスナー研究者の主張とは異なり――数多く存在しており、決してトマセロだけではないということである。上で見たように、フィッシャーがトマセロ及びプレスナーにとっての自然主義陣営の「敵」であるとするダーウィンもドーキンスもデネットも、進化論という自然主義的基盤に立った上で、人間の文化的特性について論じている。つまり彼らもまた「第三の道」を選んだと言えるのであり、「第三の道」を選ぶことがプレスナー研究にとっての「英雄」の条件であるとすれば、そうした「英雄」は相当数存在しているということになる。

とはいえしかし、フィッシャーが強調していない――また、それをこそ強調すべきであった――別の点においては、プレスナー研究者がトマセロを「英雄」と持ち上げてしかるべき理由がある。それは何かと言うと、トマセロとプレスナーが共に人間におけるたった一つの能力のみ――トマセロにおいては「共有志向性」、またプレスナーにおいては「脱中心性」――から人間の文化的生活と動物の非文

化的生活の全ての違いを説明しようとしているということである。冒頭でも触れたように、なぜ人間だけがこれほど大規模な文化を発達させることができたのか、それを可能にした人間の能力とは何なのか、などと問う研究者は一定数存在する。しかし、それを可能にした人間の能力とは人間固有のただ一つの能力であるとする研究者は稀であると言って良いであろう。つまり、フィッシャーの意図する点とは幾らか異なるが、人間のあらゆる文化特性をたった一つの人間固有の能力から説明しようとするという点においては、プレスナー研究者がトマセロを今日の「英雄」と呼ぶことには違和感はない。

しかしそのような仕方でトマセロをプレスナー研究にとっての21世紀の「英雄」であると認めたにしても、今度はまた別の問題が生じてくる。その問題とは、その「英雄」が――プレスナー研究者が考えるように――本当にプレスナー哲学の先駆性と正しさに確固たる裏付けを与えてくれるものであるのかというものである。というのもトマセロは確かに国際的に著名な科学者ではあるが、その仮説には反対者も少なくないのである。

トマセロの仮説への科学的反論にはまず、「文化（の蓄積）」は人間だけに見出せるものかどうかというものがある。確かに文化の大規模な蓄積は人間だけに見出せるものであるということに反対する学者は稀であろうが、文化の蓄積はそもそも人間にしか見られないというトマセロの主張に対しては少なからぬ反論が見出せる[32)]。

仮にそうした反論を一旦措いて、「文化」とは完全に人間のみに見出せるものであると前提するにしてもなお問題は残っている。人間を動物界において特別な文化存在たらしめているものは根本的にはたった一つの人間固有の能力であるというプレスナーとトマセロに共通する考えは、先に見たように珍しいものなのであるが、これは裏を返せば、そうした考えが広く受け入れられているものではないということを意味している。人間とチンパンジーが分岐してからの600万年という時間は、その間に二つ以上の異なる人間固有の能力（認識能力）が発達したと考えるには短すぎるという先に見たトマセロの初期著作における主張には、少なくとも筆者の知る限り、これといった根拠がある訳ではない。また、人間と他の霊長類の間の様々な違いは可能な限り節約的（簡潔）に説明すべきであり、その説明の仕方に従えばあらゆる人間の文化はただ一つの人間固有の能力を原因とするという結論に至るという後の論文における説明も強い説得力があるようには見受け

られない。というのもまず、人間と他の霊長類の間の様々な相違は可能な限り節約的に説明されるべきであるという考えには――トマセロ自身も重々承知しているように――少なからぬ反対者が存在している[33]。それにたとえ、可能な限り節約的に説明すべきであるという仮定が正しいにしても、それは必ずしも「ただ一つの人間固有の能力があらゆる人間文化の源泉である」というトマセロ流の結論に至ることを意味しない。なぜなら、最も節約的な説明が二つ以上の人間固有の能力を要求するということも十分考えられ得るし、それにまた、人間の能力と他の霊長類の能力の質的相違よりも量的相違を想定する方がより節約的な説明となるということも考えられ得るからである[34]。

文化的生物としての人間と非文化的生物としての他の霊長類の様々な違いをただ一つの人間固有の能力から説明しようとするトマセロの理論には、上記のような幾つかの問題が随伴しているのであるが[35]、そうした問題に目を瞑るとしてなお、フィッシャーやクリューガーといったプレスナー研究者が敢えてか気付かずか素通りしている別の極めて重要な問題が存在する。それは、「共有志向性」という能力が本当に人間のみに備わった能力であるかどうかという問題である。トマセロによれば志向性を共有するという能力は人間だけに備わったものだというのであるが、それは――先に触れたように――同時に、複数個体の意図の接続・共有を必要とする「協力行動」は人間のみに見られるものであり、最近縁種のチンパンジーにあってさえそれは「総じて……見られない」[36]ということを含意している。

しかし、意図的な協力行動とは人間だけに見られるものであるというこうしたトマセロの考えには、人類学者フォルカー・ゾマー、(嘗てのトマセロの共同研究者であった) 霊長類学者クリストフ・ボッシュ、霊長類学者／動物行動学者フランス・ドゥ・ヴァールなどといった強硬な反対者たちが存在している[37]。つまり、人間のみが志向性を共有し、従って人間のみが (意図的な) 協力行動を行う・行えるという考えは現代の自然科学の世界において決して広く受け入れられた考えではないのである。

このようにトマセロの理論は幾つもの点において、今日の自然科学の世界においてまだ定説と認められたものではないのであるが、ここで思い出して貰いたいのは、本稿の主題はトマセロの理論それ自体ではなく、トマセロ理論のプレスナー研究者による受容である。つまり、ここで大事なのはトマセロの理論が正しいか

誤っているか、あるいは、有望であるか有望でないかということではない。大事なのはむしろ、そのように広く定説とされている訳ではないトマセロの理論をプレスナー研究者がプレスナー哲学の先駆性と正しさにとっての自然科学的裏付けとするのはあまりに時期尚早であろうということである。そうした時期尚早はプレスナー研究にとって一つの危険を意味している。というのもそもそも上に見たように、プレスナーの理論は――ここでは良いか悪いかは別にして――根本的には非自然科学的生気論に基づいたものであり、自然科学の発展に左右されるものではない。しかし、フィッシャーやクリューガーの様に――確定されたとみなされたというにはまだほど遠い――トマセロの自然科学的成果をプレスナー哲学に対する現代的裏付けとしてしまえば事情は変わってくる。というのもその場合には、これからもしトマセロの理論が誤っていると判断されることとなれば、プレスナーの理論もまた同時に根本から否定され、その哲学的意義を決定的な形で喪失してしまうという事態に陥ってしまうこととなるのである。

以上、大きく分けて三つの点からプレスナー研究者によるトマセロ理論の受容における諸問題を見てきたが、そうした問題にも関わらず、プレスナー研究者によるトマセロ理論の積極的な受容には少なからぬ意義があるということは強調しておきたい。哲学研究者が自身の研究対象とする過去の哲学（者）の「アクチュアリティー」を示唆することは珍しいことではない。しかし、それらの多くは筆者の知る限り、簡素で抽象的な示唆の域を超えることはない。そうした現状にあって、ここに言及したプレスナー研究者らが現代の自然科学の一問題に正面切って取り組むことで、プレスナー哲学の「アクチュアリティー」を単なる示唆といった形ではなく、現代の科学状況との関連において具体的な形で描出したということは高く評価されてしかるべきであろう。

その描出に、上記のような幾つかの具体的な難点が指摘できるとしても、それは決して消極的な意味だけを持つものではない。もし過去の哲学（者）の「アクチュアリティー」についての示唆が簡素で漠然としたものに留まるのであれば、その是非を詳しく論じることは容易ではない。ここでプレスナー哲学の現代性について上記の様に具体的に難点を指摘することが出来たのは、またそれによって、人間と他の動物（霊長類）の間の決定的な差異とはなにかという問題をアクチュアルな形で具体的に論じることができたのは、ここに挙げたプレスナー研究者たちが、プレスナーの真意を解釈するという主要な研究課題を大きく超えて現代の

問題に直接取り組んでくれたお陰なのである。

過去の哲学の研究がその哲学者の真意を明らかにすることだけを目的とすべきであるならば、ここに言及したプレスナー研究者たちは明らかにその範疇を逸脱している。しかしもし過去の哲学の「アクチュアリティー」を真面目に検討することが許されるのであれば、あるいは要求されさえするのであれば、彼らのように現代の具体的問題に直接取り組むことが不可欠であろう（もちろんこれは決して自然科学の問題に限ったことではなく、どの分野の問題であっても同様である）。そうした取り組みを行ったという点において――最後にもう一度繰り返せば――ここに言及したプレスナー研究者たちの試みは、その幾つもの問題にもかかわらず一つの看過すべきでない意義を有していると言ってしかるべきであろう。

註

1) 本稿では以下、チンパンジーと並ぶ（現存する）ヒトの最近縁種であるボノボには言及しないが、「チンパンジー」という言葉を使う場合ボノボも同時に含意されている。
2) Vgl. Mathias Wunsch: Was macht menschliches Denken einzigartig?, in: *Interdisziplinäre Anthropologie* 3 (2016), S. 259-288, hier S. 259-267.
3) 文化の「蓄積（累積）」が人間のみに可能であるという主張については、マイケル・トマセロ、『心とことばの起源を探る』、大堀壽夫他訳、勁草書房、2007年、6, 49-50頁、および、マイケル・トマセロ、『ヒトはなぜ協力するのか』、橋彌和秀訳、勁草書房、2014年、4頁を参照。
4) 以下に見るようにトマセロは近年、人間と他の霊長類を決定的に分かつ二つの要素（能力）を想定しているが、しかしそれら二要素は実の所、一つの能力発展過程の二つのステップとして想定されている。
5) トマセロ、『心とことばの起源を探る』、2-4頁参照。
6) Vgl. Hannes Rakoczy/Michael Tomasello: Kollektive Intentionalität und kulturelle Entwicklung, in: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* (*DZPh*) 56 (2008), S. 1-10, hier S. 2-3.
7) Vgl. David Premack/Guy Woodruff: Does the chimpanzee have a theory of mind?, in: *Behavioral and Brain Sciences* 1 (1978), S. 515–526, hier S. 515.
8) トマセロが1999年の時点で用いていた「心」という概念と彼が後に用いるようになる「志向性」という概念の間には、ここで問題となるような大きな違いは見られないが、全く違いがないという訳ではない。「心」という概念についてはトマセロ、『心とことばの起源を探る』、238- 241頁を参照。
9) マイケル・トマセロ、『思考の自然誌』、橋彌和秀訳、勁草書房、2021年、11-51頁参照。
10) トマセロ、『思考の自然誌』、iv頁。この引用は2014年の著作からのものであるが、トマセロはすでに2005年の時点でこうした見解へと舵を切っている（vgl. Wunsch: Was macht menschliches Denken einzigartig?, S. 269-270）。

11）トマセロ、『思考の自然誌』、32頁参照。

12）同上、8-9頁、およびトマセロ、『道徳の自然誌』、5-11頁参照。この二つの段階が人類史のどの時点で起きたのかは彼の理論には重要ではないとしながらも、トマセロは彼なりの仮説を提示している。それによると、第一段階は40万年前頃、第二段階は20 〜 10数万年前頃ではないかと想定されている。この点に関しては、トマセロ、『道徳の自然誌』、125, 137頁、およびトマセロ、『志向の自然誌』、60, 144, 242頁参照。

13）トマセロ、『思考の自然誌』、115-116, 207-211頁参照。

14）トマセロ、『ヒトはなぜ協力するのか』、4-5頁参照。

15）トマセロは2009年にドイツのヘーゲル賞も受賞しているが、筆者の知る限り、トマセロ理論のヘーゲル研究への影響は全くないとさえ言って良いように思われる。少なくとも、以下に見るような主要なプレスナー研究者たちによるトマセロへの賛辞と同等のものを主要なヘーゲル研究者の間に見つけることは容易ではないであろう。ヘーゲル賞の受賞理由については、Jürgen Habermas: Bohrung an der Quelle des objektiven Geistes. Hegel-Preis für Michael Tomasello, in: ders.: *Im Sog der Technokratie*, Berlin 2013, S. 166-173 を参照。

16）Vgl. Joachim Fischer: Michael Tomasello - Erster Preisträger des Wiesbadener Helmuth Plessner Preises, unter http://helmuth-plessner.de/wp-content/uploads/2014/12/Fischer-Laudatio-Tomasello.pdf, abgerufen am 12.11.2021, S. 2-4 (im folgenden abgekürzt: Michael Tomasello (E)).

17）Vgl. ebd., S. 4-7.

18）Vgl. Joachim Fischer: Michael Tomasello - Protagonist der Philosophischen Anthropologie des 21. Jahrhunderts?, in: *Zeitschrift für Theoretische Soziologie* (*ZTS*), 3. Sonderband (2016), S. 6-27 (im folgenden abgekürzt: Michael Tomasello (P)), hier S. 6.

19）Vgl. Helmuth Plessner: *Gesammelte Schriften IV. Die Stufen des Organischen und der Mensch. Einleitung in die philosophische Anthropologie*, Frankfurt/M 2003, S. 362-364.

20）Vgl. Fischer: Michael Tomasello (E), S. 6-7; ders.: Michael Tomasello (P), S. 18-20.

21）Fischer: Michael Tomasello (E), S. 7. Vgl. ebd., S. 2.

22）Vgl. Fischer: Michael Tomasello (P).

23）Vgl.Hans-Peter Krüger: Intentionalität und Mentalität als explanans und explanandum, in: *DZPh* 55 (2007), S. 789-814, hier S. 792; ders.: The Nascence of Modern Man. Two Approaches to the Problem – Biological Evolutionary Theory and Philosophical Anthropology, in: Jos de Mul (Hrsg.): *Plessner's Philosophical Anthropology. Perspectives and Prospects,* Amsterdam 2014, S. 57-78, hier S. 63-64. 筆者は以前別の論文でクリューガーは、プレスナーの理論こそが（彼の知る限り）自然主義と文化主義の両方を十全な形で調和させることのできる唯一の理論であると主張していると書いたが、正確には、彼は「プレスナーの理論こそが（彼の知る限り）両者を十全な形で調和させることのできる唯一の根本的基礎付けを伴った人類学上の理論であると主張している」とでも書くべきであった。この点に関してここで訂正しておきたい。ここに関しては、濵田洋輔、「ダーウィン進化論の観点から見たプレスナー哲学的人間学の根本問題」、『哲学・科学史論叢』22号、2020年、51-71頁、ここでは62頁、および、Krüger: The Nascence of Modern Man, S. 58参照。

24）Vgl. Christian Thies: Michael Tomasello und die philosophische Anthropologie, in: *Philosophische Rundschau* 64 (2017), S. 107-121, hier S. 115. ただし、ティースはこの点に関して、トマセロとプレスナーの間よりもトマセロとゲーレンの間の方により一層の共通点があると主張している（vgl. ebd., S. 116）。

25）Vgl. Joachim Fischer: Philosophical Anthropology. A Third Way between Darwinism and Foucaultism, in: Jos de Mul (Hrsg.), op. cit., S. 41-56, hier S. 44-46; ders.: Michael Tomasello (P), S. 14.

26）Vgl. Fischer: Michael Tomasello (E), S. 3.

27）チャールズ・ダーウィン、『人間の由来（上）』、長谷川眞理子訳、講談社、2016年、205-232頁、ダニエル・デネット、『ダーウィンの危険な思想』、山口泰司監訳、青土社、2001年、443-486頁、および、リチャード・ドーキンス、『利己的な遺伝子』、日高敏隆他訳、紀伊国屋書店、2018年、325-345頁参照。

28）トマセロ、『道徳の自然誌』、16頁、および、トマセロ、『思考の自然誌』、22-23頁参照。

29）トマセロ、『心とことばの起源を探る』、61頁参照。

30）濵田、「ダーウィン進化論の観点から見たプレスナー哲学的人間学の根本問題」、57-61頁参照。

31）同上、65-66頁参照。

32）例えば、フランス・ドゥ・ヴァール、『サルとすし職人』、西田利貞/藤井留美訳、原書房、2002年、34頁、および、西田利貞、『人間性はどこから来たか』、京都大学学術出版会、2007年、205頁参照。

33）Vgl. Rakoczy/Tomasello: Kollektive Intentionalität und kulturelle Entwicklung. トマセロ、『思考の自然誌』、220-227頁も参照。

34）人間にXというチンパンジーには見られない質的に特殊な能力が出現したために人間の文化（蓄積）が可能になったと考えるよりは、人間のA、B、Cという能力がチンパンジーのA、B、Cという能力に比べて量的により高度になったために人間の文化（蓄積）が可能になったと考える方が、進化論的により節約的な説明だと言える可能性は十分考えられると思われる。

35）Vgl. auch Welsch: Just what is it that makes homo sapiens so different, so appealing?; Michael N. Forster: Menschen und andere Tiere, in: *DZPh* 55 (2007), S. 761-767.

36）トマセロ、『思考の自然誌』、59-60頁。

37）フランス・ドゥ・ヴァール、『道徳性の起源』、柴田裕之訳、紀伊国屋書店、2015年、152-159頁、および、フランス・ドゥ・ヴァール、『動物の賢さがわかるほど人間は賢いのか』、松沢哲郎監訳、 紀伊国屋書店、2017 年、246-259 頁参照。Vgl. Christophe Boesch: Joint cooperative hunting among wild chimpanzees: Taking natural observations seriously, in: *Behavioral and Brain Sciences* 28 (2005), S. 692–693; Volker Sommer: Evolution ernst nehmen, in: J. Oehler(Hrsg.): *Der Mensch – Evolution, Natur und Kultur*, Berlin/Heidelberg 2010, S. 39-58, hier 50-51. Vgl. dazu noch Thies: Michael Tomasello und die philosophische Anthropologie, S. 118; Wunsch: Was macht menschliches Denken einzigartig?, S. 273-278.